



新入りいじめとセックスの関係：
スポーツの新入りいじめ行為における<セックス+暴力>の問題分析

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: レンスキィ, ヘレン・ジェファーソン, 熊安, 貴美江 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011266

[翻訳]

新入りいじめとセックスの関係

—スポーツの新入りいじめ行為における〈セックス+暴力〉の問題分析—

ヘレン・ジェファーソン・レンスキ

〈論文紹介〉

熊 安 貴美江

この論文が収録されているのは、最近北米で可視化されるようになった、スポーツチームへの入会儀式の名を借りておこなわれる「ヘイジング (Hazing) = 新入りいじめ」の問題に、総合的に取りくんだ最初の出版物である。歴史、実態、理論分析、再生産のしくみ、防止のための方策などといった観点から成る10編の論考の中からこの論文を選んだのは、男性チームスポーツにおける「新入りいじめ」の主要な構成要素となっている〈性暴力〉にこの論文が着目し、それを理解するための理論的な分析を試みているからである。

著者ヘレン・レンスキは、トロント大学のオンタリオ教育研究所 (Ontario Institute for Studies in Education) に所属するスポーツ社会学者であり、ここ20年来、スポーツにおけるジェンダーとセクシュアリティの問題に精力的に取り組むとともに、近年はオリンピック産業が社会にもたらす否定的な影響について批判的に議論を展開している。

彼女のジェンダー関心のひとつに、スポーツにおけるセクシュアル・ハラスメントの問題があり、そこでの彼女の主な仕事はスポーツにおける性暴力をフェミニズムの観点から分析し、その理解に理論的な枠組みを提供することである。セクシュアル・ハラスメントを理解するためには、単にジェンダーの境界線における差別化だけに焦点をあてるのではなく、スポーツ文化に強力に存在するホモフォビア (同性愛嫌悪) や、ジェンダーカテゴリー内における権力関係の解明などに取りくむことが必要であると、彼女は論じ続けている。近年、スポーツにおけるセクシュアル・ハラスメントという研究課題に着手し始めた訳者にとって、レンスキらが提供する理論的な解釈の枠組みは、調査をデザインしたり、数量的、質的データを読み解く際に、新たな構想と文脈の可能性を示唆してくれる。

ここで紹介する論文はその分析のひとつであり、男性チームスポーツにおいて形成される男性同士の同胞愛社会が、〈セックス+暴力〉を介在しながらいかにして、女性から切り離された排他的な空間でハイパーマスキュリンな価値観を称揚し、ジェンダー内ヒエラルキーを再生産しているかが論じられている。ここでとりあげる事例がかなり特殊で最悪なものを含むことはあらかじめことわられているが、これらの事例から導かれる解釈が、日本の男性スポーツチームメンバーによる集団暴行事件にみられる文脈と、まったく無縁であるとはいいがたい。この論文は、広がりつつあるセクシュアル・ハラスメントの理解に新たな説明を加えると同時に、日本のスポーツ研究ではあまり可視化されていないスポーツとセクシュアリティの問題に、分析課題と解釈のあらたなモデルを提示している。

〈本文〉

今日の西欧社会において男性スポーツが「男性優位の最後の砦」であるという考えは、これまでのところ自明である。女性や性的マイノリティ、有色人種の人々、労働者階級の人々がほとんど半世紀にわたって政治的な組織をつくり実践（activism）活動してきたのにもかかわらず、スポーツにおける社会的性的諸関係のいくつかはこれらの進んだ社会運動によって手をつけられずにきたといえよう。

スポーツにおいて長期化している最も気がかりな社会問題のひとつに、男性競技者によるハラスメントと暴力の問題がある。社会的に浸透している少女／女性に対する暴力の問題は、1970年代以来学校や大学、職場、また私的な家庭領域において取り上げられてきたにもかかわらず、スポーツの管理責任者は1980年代後半になるまでこの問題を実質的に無視してきた（Brackenridge, 2001；Donnelly, 1999；Lenskyj, 1992a, 1992b）。スポーツの文脈からの例には事欠かない；たとえば、少女／女性をいじめ、虐待するコーチたち；デートレイプを犯す競技者たち；とりわけ大学キャンパスで集団レイプに手を染めるスポーツチーム；そしてこの章でとりあげる「新入りいじめ（hazing）」を装った男性競技者の性的暴力などである。ここでは、サディスティックな性的行為がスポーツ新入りいじめ行為の主要な構成要素であることを証明することから、議論を始めようと思う。そして次に、既存の研究事例に基づいて新入りいじめの類型論を展開しよう。男性スポーツの性+暴力問題を理解するために、ジーン・マリー・ブルーム、バーダ・バースティン、ジョン・ロイ、そしてブライアン・プロンガーらが立てた議論を検証する。特にわたしは、基幹となるふたつの主張を支持する議論を提示しておこうと思う。つまりひとつめは、男性スポーツチームの同胞愛社会（fratriarchies）としての機能について、ふたつめは、男性競技者に性的規範と性的抑圧を課すスポーツイデオロギーについて、である。これらの機能と、男性のみのスポーツにみられる矛盾であるホモエロティシズム対ホモフォビア（同性愛嫌悪）

の問題とのつながりも検証されよう。最後に、教育機関やスポーツ関連の職場でのセクシュアル・ハラスメント（防止）方針に、新入りいじめを入れることの是非を検証することによって、社会変革のための方策を考察する。ここで分析するある特定のスポーツ新入りいじめ行為は、ともにチームへの入会儀式を成り立たせる性的暴行行為の攻撃者および犠牲者である、男性チームメンバーだけを対象とする。

男性チームスポーツというのは一枚岩ではなく、また男性スポーツのサブカルチャーは、社会階級、地域、エスニシティ、性的関心などの境界に沿って区別されるべきであることをはじめに確認しておかねばならない。同様に重要なのは、スポーツのメインストリームで活躍している進歩的な男性たちは少なくとも1980年代以降、変革のために仕事をしてくる（たとえば、Kaufman, 1987; Messner and Sabo, 1990などを参照）、進歩はより暴力のない、より包括的な、そしてより人間的なスポーツ形態を生み出す方向に向かっている。以下で議論する問題に含まれているのは、新入りいじめの最も野蛮な例を生じさせている（アメリカン）フットボールなど、男性チームスポーツの最悪の筋書きである。

カナダと合衆国における法的な状況

2002年半ばまでに7つを除くすべてのアメリカの州で、特に新入りいじめを禁止し、これに関連する行為を罪とみなす法案が可決された。一例として、オハイオ州の法案第444は新入りいじめを以下のように定義している；「犠牲者を含む他者に対して、ある学生組織や他の組織への入会儀式として行われる行為で、個人に対して精神的、身体的な危害を及ぼすような、あらゆる行為や強要行為をすること」。他者の品格を落とし、その名を汚すような精神的身体的苦痛や困惑を与えたり、いじめたり、嘲笑するなどといった行為を、大学の（防止）方針は典型的行為として特定している。罰則には、公的基金や奨学金のカット；停学もしくは大学からの除籍；州法に基づいた刑事、民事訴訟などが含まれる。アルコールや違法薬物または男性スポーツでのアナボリックステロイド使用などについては、それがいじめの虐待者、犠牲者双方の抑制機能を妨げる作用をもたらすと認めている方針もいくつかある。

カナダでは大学、学校管轄区域、スポーツ組織などが平行して（方針の策定を）先導してきたが、政府レベルでも州レベルでも法案化はなされていない。このことはある意味で、アメリカでは広範囲にわたって競技奨学金制度が適用されていたり、NCAAの構造がセミプロ化していることによって説明されうる。つまりこのような競技システムは、カナダよりもアメリカの大学スポーツにおいて新入りいじめ問題が広範にわたっていることの要因となっているのだ。しかしながら、カナダにおいても合衆国と同様に、スポーツ新入りいじめの多くの証拠が見出されている。

(たとえば、Bryshun, 1997 ; Johnson, 2000)

いくつかの反新入りいじめ (anti-hazing) の方針は、参加者が進んでそれにかかわったかどうかという意思にかかわらず、新入りいじめという行為が成り立つことを強調している。この文脈では、仲間からのプレッシャーや心理的な強制が、身体的な力と同様に、あるいはより効果的にはたらく。なぜならこうした方法は、目に見える虐待の証拠をなにも残さないからである。この点についてはドメスティック・バイオレンスの状況と似通っている。つまり、ドメスティック・バイオレンスの犠牲者は、さまざまに入り組んだ理由で暴力的なパートナーと一緒に居続けるのだが、そうした理由の中には、パートナーの心理的な虐待によって埋め込まれた思い込みがある。それはたとえば、彼女が尊敬に値しない人物であるとか、彼女に落ち度があるといった理由で暴力的に扱われても仕方がないのだとかいう思い込みである。

同様に、男性スポーツのサブカルチャーにおいて、新入りいじめの神話は、新入りはその「男らしさ」とチームへの献身を証明するまでは、軽蔑にしか値しない存在であるという考えを助長し、さらに新入りいじめ行為に従わない者は、恥をかかされ、村八分扱いにされる (Johnson, 2000)。心理的な支配は、婚姻内や親密な関係のなかでの虐待者による支配ほど深くも長くも続かないのだが、男性スポーツサブカルチャーの外側に位置する「分別をわきまえた人」にとっては、ベテラン競技者によって日常的に行われるこの種の侮辱的な虐待行為を、強く独立した若い男性がすすんで甘受するというのは、男性スポーツ内のヒエラルキーを分析しなければ理解できないことである。

新入りいじめにおける性暴力：類型

スポーツ新入りいじめ行為に関する研究やメディアの報告は、少ないが少しずつ増えており、それらによって多くの事例が、カナダや合衆国の法廷や教育機関によって新入りいじめと解釈されることとなった。既存の類型は、その行為の合法性／違法性、犠牲者に対する危険や危害の程度、アルコールやほかの違法な薬物の使用などに焦点化する傾向があり、それらは以下の二つの例が示すようなものである。

1. NCAAのスポーツチームにみられる入会儀式 (独立した4つのカテゴリー)
 - a. 受け入れ可能な行為 (肯定的な行為のみ)
 - b. 問題ある行為 (屈辱を与える、品位を貶める)
 - c. アルコール関連の行為 (酒飲みコンテスト)
 - d. 受け入れられない行為、潜在的違法行為 (危険な行為、犯罪的な行為) (Hoover, 1999)

2. アメリカの高校にみられる入会儀式（4つの重複するカテゴリー）

- a. 屈辱を与える新入りいじめ
- b. 潜在的に違法な新入りいじめ
- c. 薬物乱用の新入りいじめ
- d. 危険な新入りいじめ (Hoover and Pollard, 2000)

わたしはこれらの類型を用いるのではなく、男性スポーツ新入りいじめ行為が明に暗にもつ、セックス+暴力の問題に基づいてカテゴリーをつくらうと思う。下に示す例に含まれているのは、男性の新入りいじめの虐待者とその犠牲者であり、ここでは男性犠牲者が強いられて女性への集団攻撃に参加する場合の例を除いている。犠牲者を従わせるような身体的、心理的な強要は、以下のすべての例に共通するものとする。

1. 性的に貶める

- ・強要されて女装、屈辱的な服装をする
- ・強要されて女性の衛生用品を購入する
- ・強要されて公衆の面前で裸になる
- ・強要されて睾丸の毛を剃る
- ・強要されて全身を染める

より進んだ社会的文脈においては、服装やふるまいの面で女性役割をしてみることは性的な貶めとはみなされず、楽しみとしての行為や、ジェンダー境界に対する皮肉な挑戦としての行為であることを指摘しておきたい。しかしながら、男性の入会儀式を構成する主要な要素は、女性から彼らを引き離し女性の優位に立つことであり（後述）、それゆえ、強要された異性装は、男性スポーツサブカルチャーの文脈では明らかに性的な貶めを意味するのである。

2. 性的暴行

- ・ひとりあるいは複数によるサディスティックな性的暴行の対象にされる（アナルレイプ、あるいはアナルへの指または器具の挿入）
- ・集団レイプへの参加の強要（虐待者として）
- ・ベテラン選手へのオーラルセックスの強要
- ・動物あるいは複数のパートナーとのセックスの強要
- ・他者へのセクシュアル・ハラメントの強要

3. 性的な含みのある身体的な辱め

- ・「食い込ませ」の対象にされる（下着を引っ張りあげて性器に不快感を生じさせる）
- ・尿や排泄物を含む、食品でないものの飲食の強要
- ・ベテラン選手への象徴的または現実的な隷属状態
- ・性的にあからさまな、侮辱的、貶め的なことばの的にされる
- ・自傷行為の強要

この類型をつくるにあたり、新入りいじめという名のもとに隠された、論外にサディスティックな行為の詳細を露骨に描くことを、わたしは故意に避けた。これらの行為を描いた質的なデータは、この収録本の他の個所にあり、また同様にアルフレッド大学の研究 (Hoover, 1999; Hoover & Pollard, 2000)、サポーとパネピント (1990)、ジョンソン (2000) およびブライシュン (1997) の修士論文、ストップ・ヘイジング・ウェブサイト (www.stophazing.org) にも見られる。

男性スポーツ新入りいじめ行為にみられるサディスティックなセックス

1. 男性スポーツチームの同胞愛社会 (fratriarchies) としての機能

「同胞愛社会 (fratriarchies)」ということばは同胞愛 (fraternity) とスポーツチームと他の同胞愛的秩序あるいは利害集団のことを表現している。ジョン・ロイがずばりと言ったように、同胞愛社会は「男性どうしを結びつけ、その連帯を維持し、女性の地位を下げる」。

家族責任を担わない若い男たちがつくるある種の近代サブカルチュア集団として、同胞愛社会は利己心と自由を煽り、「身体的能力による権威を追及し」、そして「暴力的で行為遂行的 (performative) な男らしさのスタイル」を奨励する (Loy, 1995:267)。同胞愛社会は、男性の理想としてのハイパーマスキュリニティ (hypermasculinity: 過度な男らしさ) —他者を支配する力の行使—をよく例証して見せており、「有毒なテストステロン」という概念はこれらの集団に息づいている力をうまく言い当てている (Ignatieff, 1998)。マイケル・キンメル (1991: 5) が説明するように、ハイパーマスキュリンなアイデンティティを絶え間なく追求した結果として、「ゆがめられた入会儀式」が生み出される；それはミソジニー (女性嫌悪) とホモフォビア (同性愛嫌悪) によってもたらされるもので、たとえば若者たちを身体的、性的な暴行やゲイ・バッシングや集団レイプに過剰に駆り立てているのである。

そのことばが示唆するように、同胞愛社会はそれ自体ヒエラルキーを内在しており、入会儀式によって確立されているようなところもある。ジェイ・ジョンソンの研究 (2000) にみられるある男性大学競技者の説明によれば、新入りは「彼らの位置」を教わらねばならず、他者の尊敬を

勝ち得ねばならないのだという。ベテラン競技者の虐待的な扱いに対してコーチに不満をもらした新入りを馬鹿にして、この競技者は次のように言う；「新入りたちは、俺たちのためにプレイするため学校に来ることで、俺たちに好意を示しているつもりらしいんだ。その逆じゃなく、ね」。

スポーツイデオロギーはそれ自体ヒエラルキーとエリート主義と権威主義的価値観を内包している一方で、より広い意味での社会的ヒエラルキーや闘争の問題から、スポーツ参加者のエネルギーをそらしてしまう。あるいはジーン・マリー・ブルームのことばを借りれば、「ブルジョア秩序に対する反乱 (Brohm, 1976:59)」から彼らの注意を引き離す。その代わりにスポーツイデオロギーは、平等および利点-対等な競争空間およびエスニシティや社会階級にかかわらず万人が参加できるという利点-の原則に基づいて作動しているシステムであるかのようなふりをしている。このような神話は、男性スポーツ文化に内在する決定的なパワーヒエラルキーを隠蔽しており、それはたとえば、新入りがチームへの入会儀礼としていじめられたり虐待されたりするのを当然とみなすような前提を含んでいる。このように、社会的階層の底辺にいる新入りの地位と、彼らの上に位置するベテランやキャプテンやコーチの地位は、象徴的にも経験的にも身体的、性的貶めによって補強されていくのである。

1900年代初期の北アメリカで成立した、男性の隠蔽された社会について論じたバーダ・バースティン (1999:62) は、それがいかに「女性引き離しの儀式と、男性らしさの絆、および世代間の社会化」によって特徴づけられるかを説明している。20世紀までにスポーツと軍隊はこの種の男性入会儀式の機能を引き継いだ。その儀式の目的は、少年や若い男性を母なる影響から断絶し、ヘゲモニックな男らしさを増進することであった。

スポーツは密接ではげしい身体接触によって、男性同士の制度的な絆をつくりだした。その絆は父親と息子間の、あるいは兄弟どうしの関係の社会的代用物のようなものである。その身体接触は、フロイト派のことばを借りれば「リビドーのカセクシス」(性的絆)が結ばれる場であり、女性や彼女らの家庭的領域やその道徳とは異なる別の、男らしさのアイデンティティを形成する場を提供するのである (Burstyn, 1994:64)。

1900年代初期以来、ほとんどなにも変わっていない；男性競技者役割へと社会化されるためには、あいかわらず身体的タフさと感情的禁欲が要求され続けているのである (White and Young, 1999)。とりわけフットボールやアイスホッケーのような男性プロスポーツにおける暴力への賛美は、オーナーやコーチや仲間の競技者や観客やマスメディアなど、暴力を禁ずることができないだけでなく暴力を報奨しようとする人々の心性を明らかに反映している。

スポーツにおける暴力を支持する多くの大衆は同時に、頻繁に生じる怪我や早期のリタイア、

あるいは死に対してさえ無関心である。そしてこれらは、スポーツ興行産業で論客として働く特権を得るために、若い男性たちが支払っている代償なのである。グレッグ・マルゼッキとトミスラバ・ケイパー（2001:175）がうまく指摘したように、スポーツにおける暴力の広がりや許容、およびその行使者に対して与えられる保護は、「かつてのドメスティック・アビューズ（近親者による虐待）をとりまいた言説をしのばせる。つまりそこでは最初、大切な他者を扱うための不幸にも矛盾した方法として、暴力が用いられていると説明されたのである。」ちょうど、私的な領域が公的政策や法律にとって介入すべからざる領域と考えられていたように（「男性の家庭は彼にとっての城である」）、人々はいつも「政治をスポーツの外に」とか、もっと正確に言えば男性のプロスポーツやオリンピックの外に、という声をいつも聞いているということである（Lenskyj, 2000）。スポーツは政治に無関心である—つまり、社会的行為を体系づけているほかの制度に対して向けられている公的、政治的、道徳的な監視から、どういうわけかスポーツだけを免除させる“ファイアーウォール”によって保護されている—という考えのために、もっともひどい暴力のいくつかが野放しにされている。

2. 性的規範と性的抑圧を課すスポーツイデオロギー

スポーツイデオロギーのふたつめの点についてブルームは、スポーツが「自分自身の痛みを楽しめるようにするようなサドマゾヒスティックなパーソナリティ」を育成する一方で、エロティックな楽しみをいかにして筋肉の動きに取り替えているかを説明した（Brohm, 1976:57）。

バースティンは、1800年代以降の西欧社会における男性スポーツの発展過程を調べた論文の中で、この点について詳述している。軍隊と同様スポーツは今でもそうであるように、「男らしく攻撃的で性的な野獣」をそのなかにつなぎ止める領野となったのであり、彼／それは、そうした資質が賛美されるようにそこで訓練されている。女性や家族や人間関係といった、伝統的に女性の領域と結びついてきた価値から、男性の身体的、性的エネルギーは切り離されてきた。その代わりに少年／男性は排他的な男性だけの領域で社会化され、そこで彼らはしばしば社会階級やエスニックな境界をまたがるような独特の男らしさの絆を形成してきた。

この排他的ホモソーシャルな相互関係は、男性スポーツ集団の中で作動しつづける強力なホモエロティックな次元を生み出すのだが、重要なことに、そのホモエロティックな次元は同時にそのなかで否定され続けているのである。

男性たちは男らしさを体現する感覚を醸成するために、自分自身の身体やチームメイトの身体や競争相手の身体を用いて、ほかの男たちに立ち向かう。スポーツは、男らしさを官能化する機会を男たちに与えているが、なおも男たちの真正（orthodox）な「ヘテロセクシュアルと

いう] 地位を維持しているのである (Pronger, 1999:190-191)。

男性チームスポーツの (ヘテロに) セクシュアライズされた言語—俗に言う「つっこむ—つっこまれる (penetrating - penetrated)」という用語—は、そこに参加する人々を身体的、性的に興奮させる可能性を潜在的に示している (Burstyn, 1999:215)。同時に、広く行き渡ったホモフォビア (同性愛嫌悪) の観念が、ホモエロティシズムのあからさまな形跡をうまく打ち消すよう、好都合に作用している。1990年代および21世紀にはかなり受容的な土壌が形成されたにもかかわらず、男性競技者が (ゲイであると) 公にカムアウトすることが今だにスポーツの真正性 (orthodoxy) を乱すほどに、その作用は効果があった。皮肉なことに、男性競技者にとって、同性愛であることを明らかにするよりは、ホモフォビア (同性愛嫌悪) を「ひけらかす」ほうが、たいていのスポーツの文脈に受け入れられるのである。

バースティンが説明するようにホモフォビア (同性愛嫌悪) はしばしば、男性が「女性的な」資質—柔らかさ、弱さ、依存性、性的受動性—をもつのではないかという恐れによって形成される (Burstyn, 1999:203)。たとえば、フットボールのコーチや選手やファンたちは、味方のチームを励まし、相手チームを侮辱するためにミソジニー (女性嫌悪) でホモフォビア (同性愛嫌悪) なわいせつなことばを用いる (Pronger, 1993)。この点についてマイケル・カフマン (1987:23) は以下のように論じている。つまり、男性のホモフォビア (同性愛嫌悪) は、「ホモセクシュアルな魅惑を過度に否定するなか明らかにみてとれ、それはほかの男に対する暴力として表現される。・・・それは男性が他の男性に感じる魅力を表現し放出するための、父権主義社会における主要な手段のひとつである」。性と暴力のコンビネーション、つまりサドマゾヒズムは、このプロセスが必然的にアンバランスなやり方で出現したものである。新入りいじめはとりわけ、いじめるものと犠牲者の両者をこのサドマゾヒスティックな儀式に参加させる。そしてその儀式は、男性スポーツに充満しているホモエロティシズムを、(この文脈においては) より受容可能な行為としての男性同士の暴力の背後に隠しているのである。

カフマンは、男性間の暴力によって表現されるホモフォビア (同性愛嫌悪) と、女性に対する男性の暴力という広範な社会問題とを結びつけて論じている。同様に、バースティンも、男性スポーツの「攻撃的なエロティシズム」つまりサドマゾヒズムはまた、ヘテロエロティシズムとヘテロセクシュアルな関係とを形作ると指摘している。男性スポーツの儀式と、勝者と敗者に対する人々の普遍的な関心は、支配と服従の価値を裏付けるものであり (Burstyn)、他方、競技者の身体の商品化は、すべての人間の身体価値を切り下げている (Brohm)。このような道徳観念のない領域では、女性やゲイの男性や新入りたちが犠牲にされても制裁を免れてしまうのである。

新入りいじめと集団レイプとの関係

集団の団結と男性支配、および女性引き離しの儀式のうえに成り立つ同胞愛社会に社会化されるにあたり、同胞愛またはスポーツメンバーシップと性的暴行とのあいだに重要なつながりがあることが見出されても不思議ではない。アメリカの大学キャンパスでの統計データからは、デートレイプや集団レイプを含む性的暴行の判決を受ける学生のうち、男性競技者があまりに多く、彼らは、それ以外の犯罪の6倍も性的犯罪を犯す傾向があることが見出される (Bausell, 1991; Warshaw, 1988)。同様なデートレイプのパターンはプロの競技者のあいだにもみられる (Benedict, 1998)。1989年のニュージャージー、グレンリッジの裁判にみられるように、高校チームのメンバーさえもが集団レイプに手を染めており、このケースの犠牲者は知能発達障害のある女性であった。学校のフットボールチームに属しているこの8人の若者が「ヒーロー」とみなされていたという事実のため、この犠牲者の言うことの信憑性がさらに疑われたのである (Lefkowitz, 1997)。(同様な事例と傾向の概略については、Lenskyj, 1992a, 1992b; Loy, 1995; Robinson, 1998を参照。)

仲間に対する集団レイプに関する調査は、新入りを犠牲にすることがいかに「優位者に対する象徴的な自己(あるいは自己の一部の)犠牲」を意味するかを示している。その優位者の身体というのは、「男らしさと優越の力を約束する、[同胞愛]という共同社会のアイデンティティを代表する身体である」。(Loy中に引用されたSanday, 1995:271)。ジェイ・ジョンソンの質問に答えて、スポーツチームの新入りいじめについてある者は以下のように説明する;「それが好きなやつもいるし、やつらはそれに熱狂しているよ・・・俺にはそれは、新入りに対する権力や支配の感情のように思えるね」(Johnson, 2000)。

集団レイプに関する通常分析によれば、それは性的な楽しみや満足よりも、地位や敵意や支配、優越の現れであることが強調されている (Loy, 1995)。しかしながら、そうした敵意や優越の表象がなぜ、単に身体的な暴行の形態でなく、性的な形態をとるのかということが問われなければならない。さらにもっと正確に言えば、男性が他の男性を性的に犠牲にすることがなぜ、彼らのホモセクシュアルな関心ではなく、ヘテロセクシュアルな優越性を示すことになるのか?ということなのだ。

この点に関して、スーザン・ブラウンミラー (1975:197) は集団レイプに隠されたホモセクシュアルな次元を読み解いた初期のフェミニスト研究者のひとりである。彼女がインタビューした若い男性は、集団レイプに伴う性的興奮について以下のように語った;「それは集団の男のだれかと犠牲者の女の子との間の性的関係に対する興奮ではなく、その大部分は男同士の関係への興奮なんだ」(Brownmiller, 1975:190)。実際のところ、ホモエロティックな要素があることは自明であ

る。ロッカールームや公衆トイレにおいて男性の裸を「ながながと見ない」という定着したルール (Pronger, 1999:191) とは違い、男性の集団レイプは明らかに、ほかの男性が性行為をしているところを見ているのである。彼らの注意は互いの上に注がれており、一方で犠牲者は、それが女性であろうと男性であろうと、ローラ・ロビンソンのことばを借りれば、「制度的サディズムの容器 (1995)」に貶められるのである。

新入りいじめをセクシュアル・ハラスメントとすることの利点と欠点

カナダやアメリカの教育機関や職場でつくられている現在のセクシュアル・ハラスメント (防止) 方針の多くは、男性の女性に対する一連の暴力に関する初期のフェミニストの概念に基づいており、それは比較的軽いことばによるハラスメントの形態 (性的性質をもった不適切なコメントなど) から、他者に対する性的暴行にまで及んでいる。

1990年代半ばまでには、たいていのカナダの短大や大学は多くの学校教育委員会と同様に、ハラスメント方針と行動規則を作成した。さらに最近では、国家レベルあるいは地方レベルのスポーツ統括団体がその例に倣っている。教育機関の方針にみられる文脈では、若い女性たちのデートレイプや知り合いによるレイプの防止が、1980年代と1990年代の主要な関心事だった。短大や大学のセクシュアル・ハラスメント方針の中には、特に性的暴行をその中を含みこむものもあった。それは、暴行の虐待者を、場合によっては刑事告訴すると同様に、学内規則の対処手続きの対象にするためである。さらに、ミソジニー (女性嫌悪) がいかに人種差別主義やホモフォビア (同性愛嫌悪)、他の形態の制度的差別と結びついているかということがしだいに理解されてくるにつれ、多くの方針がハラスメントを包括的に取り扱えるよう修正されてきた。こうした方針転換と平行して、教育機関は男子学生も女子学生も職員も同様にその対象とした;これらには、ビデオや印刷物、ポスター、自発的な討論グループ、暴力防止教育なども含まれている。同時に、アルコール使用や薬物乱用、指導活動、指導リーダーの行動規則などを統制する方針も整えられ、全般的なハラスメントの取り組みへの助力となった。これらの進歩はどれも、新入りいじめをハラスメント方針に組み込むという方策の有効性を示唆している。

インターネットでハラスメント方針について検索すると、新入りいじめをはっきりとセクシュアル・ハラスメントとして認定し、それを現行のハラスメント方針と申し立て手続き、処罰の対象に含んでいる多くのアメリカの学校や短大を見つけることができる。現在のところ、この変化の効果を評価するものは見当たらない。それゆえ、こうした方針転換によって生じうる利点と危険性を検討することは有意義であろう。

利点

- ・学校や大学のハラスメント方針による監視から男性競技者たちを免れさせてきた「ファーウォール」を崩壊させる
- ・新入りいじめにおける性+暴力の要素を明確にセクシュアル・ハラスメントと再定義し、完全に法の効力の対象とする
- ・公式な申し立てや解決と同様に、非公式なそれらをも促し、報告率を高める
- ・セクシュアル・ハラスメントと性的暴行の定義を提供し、犠牲者の権利を定義し、「いやといたらいやなのだ」ということを強調する
- ・雇主や、学校／大学管理者に責任を課し、脅迫やハラスメントのない環境を雇用者と学生に保証する
- ・セクシュアル・ハラスメントや性的暴行の犠牲者のために、現行のカウンセリングやサポートを役立たせる
- ・現行の反暴力教育プログラムを役立たせる、たとえば暴力防止のための教育 (the Mentors in Violence Prevention) プロジェクト、および性的責任をもった競技者育成 (the Athletes for Sexual Responsibility) プロジェクト (Katz, 1995) など

欠点

- ・たいていの現存するセクシュアル・ハラスメント方針が暗に焦点化しているのは、女性犠牲者である
- ・性的な新入りいじめの男性犠牲者は、彼の経験をセクシュアル・ハラスメントもしくは性的暴行とは定義しないかもしれない
- ・犠牲者が入会儀式にすすんで参加したと申し立てられた問題は、未解決のまま残る
- ・隠れて行われる新入りいじめの行為は、未解決のまま残る
- ・新入りいじめに含まれる性的でない性質の要素に対しては、ハラスメント方針の範囲では手をつけられない
- ・管理者、カウンセラー、教育者は適切で防止効果があり教育的な、最前線におけるサービスを提供するために、独特な男性スポーツのサブカルチュアを理解しなければならない

結 論

上述したような落とし穴が目すべきだとしても、新入りいじめをハラスメント方針に取り立てて組み込むことで、欠点よりは多くの利点が生じうると論じることができよう。新入りいじめ

にかかわるすべての要素—性的暴行から心理的虐待までを含む—がきちんと取り込まれるよう、この問題に対する多面的なアプローチが求められる。さらに重要な課題として、男性スポーツのサブカルチャーがより広範に根本的に変化することが緊急に求められる。この伝統的な男性スポーツのイデオロギーが、女性やゲイの男性や若い男性ルーキーにとって危険な結果をもたらすことは明白なのだから。地方のチームから国家レベルのスポーツ組織にいたるまで、すべてのレベルでの介入が必要である。

参考文献

- Bausell, R., Bausell, C., and Siegel, D. (1991). *The links among alcohol, drugs and crime on American college campuses: A national followup study*. Towson, MD: Towson State University.
- Benedict, J. (1998). *Athletes and acquaintance rape*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Brackenridge, C. (2001). *Spoilsports; Understanding and preventing sexual exploitation in sport*. London: Routledge.
- Brohm, J.M. (1976). *Sport-A prism of measured time*. London: Ink Links.
- Brownmiller, S. (1975). *Against our will*. New York: Simon & Shuster.
- Bryshun, V. (1997). *Hazing in sport: An exploratory study of veteran/rookie relations*. M.A. thesis University of Calgary.
- Burstyn, V. (1999). *The rites of men: Manhood, politics, and the culture of sport*. Toronto: University of Toronto Press.
- Donnelly, P. (1999). *Who's fair game? Sport, sexual harassment, and abuse*, in White and Young, *Sport and gender in Canada*: 107-128.
- Hoover, N. (1999). *Initiation rites and athletes for NCAA sports teams*. Alfred University National Survey. Available at: www.alfred.edu/news/html/rites_99.html.
- Hoover, N. and Pollard, N. (2000). *Initiation rites in American high schools*. Alfred university National Survey. Available at: [www.alfred.edu/news/html/hazing% 5 Fstudy.html](http://www.alfred.edu/news/html/hazing%5Fstudy.html).
- Ignatieff, M. (1998). *The warrior's honor*. New York: Owl Books.
- Johnson, J. (2000). *Sport hazing experiences in the context of anti-hazing policies: The case of two Southern Ontario universities*. M.Sc.thesis, University of Toronto.
- Katz, K. (1995). "Reconstructing masculinity in the locker room: The mentors in violence prevention project," *Harvard educational review* 65 (2) :163-174.
- Kaufman, M. (1987). "The construction of masculinity and the triad of men's violence", in M. Kaufman (Ed.), *Beyond patriarchy*. Toronto: Oxford University Press: 1 -30.
- Kimmel, M. (1991). "Issues for men in the 1990s," *Changing men* 2 : 4 -6,17.
- Lefkowitz, B. (1997). *Our guys*. New York: Vintage.
- Lenskyj, H. (2000). *Inside the Olympic industry: Power, politics and activism*. Albany NY: SUNY Press.

- Lenskyj, H. (1992a). "Unsafe at home base: Women's experiences of sexual harassment in university sport and physical education," *Women in sport and physical activity journal*, 1 (1) :19-34.
- Lenskyj, H. (1992b). "Sexual harassment: Female athletes' experiences and coaches' responsibilities," *Sports Science Periodical on Research and Technology in Sport*, 12 (6), 1-6.
- Loy, J. (1995). "The dark side of Agon: Fratriarchies, performative masculinities, sport involvement, and the phenomenon of gang rape," in K. Bette and A. Rutton, (Eds.), *International sociology of sport: Contemporary issues*. Stuttgart: Nagelschmid, 263-282.
- Malzsecki, G. and Cavar, T. (2001). "Men, masculinities, war, and sport," in N. Mandell, (Ed.), *Feminist issues: Race, class and sexuality*. Toronto: Pearson Education Canada, 166-192.
- Messner, M. and Sabo, D. (1990). *Sport, men and the gender order: Critical feminist perspectives*. Champaign, Ill: Human Kinetics Books.
- Pronger, B. (1999). "Fear and trembling: Homophobia in men's sport," in P. White and K. Young (Eds.), *Sport and gender in Canada*. Don Mills, ON: Oxford University Press, 183-196.
- Pronger, B. (January 25, 1993). "Push 'em back," *University of Toronto bulletin* 20.
- Robinson, L. (January 26, 1995). "Sick rituals purge men of all traces of femininity," *Toronto star*.
- Robinson, L. (1998). *Crossing the line: Sexual harassment and abuse in Canada's national sport*. Toronto: McClelland and Stewart.
- Sabo, D. and Panepinto, J. (1990). "Football ritual and the social production of masculinity," in M. Messner and D. Sabo (Eds.), *Sport, men and the gender order*. Champaign, Ill: Human Kinetics.
- Warshaw, R. (1988). *I never called it rape*. New York: Harper and Row.
- White, P. and Young, K., (1999). "Is sport injury gendered?" in P. White and K. Young, (Eds.), *Sport and gender in Canada*, Don Mills, ON: Oxford University Press.

[原典]

Helen Jefferson Lenskyj (2004)

What's Sex Got to Do with it? Analysing The Sex + Violence Agenda in Sport Hazing Practices, in MAKING THE TEAM.- Inside the World of Sport Initiations and Hazing,

Edited by Jay Johnson and Margery Holman.

First Published in 2004 by Canadian Scholars' Press Inc; Toronto, 83-96.

——— 謝 辞 ———

以上の翻訳は、著者である Dr. Helen Jefferson Lenskyj と、出版社 Canadian Scholars' Press (主任編集者 Ph.D. Althea Prince) に翻訳/掲載の許可をいただき、実現した。

訳出に当たり論理解のために助言をいただいた Dr. Lenskyj と、大阪女子大学人間関係論集(2005)への掲載を快諾してくださった Canadian Scholars' Press に対し、ここに感謝のこぼを申し添えたい。